

母親の態度と子どもの関係についての調査報告

岡 本 洋 三

(1981年10月15日 受理)

A Report on the Relations of Mother's Attitudes to her Child

Hiromi OKAMOTO

I. 課題と調査の概要

現代は子どもの発達にさまざまな問題をもたらしている。それは日々の新聞・テレビなどで報道されている学校内外での子どもの非行・犯罪といった「事件」としてあらわれているものばかりではない。一見、健全に成長しているようにみられている子どもたちにもさまざまな心身の異常が発見されている。この原因は簡単ではない。人間の発達に働いているさまざまな要因、たとえば家族関係を一つとってみても、その家族関係自体の現代における変化は巨大であり複雑であり、それが子どもの発達にどのような影響を与えているかは、積極的・肯定的な面もあれば消極的・否定的な面もあり、しかも周囲の社会的環境や子どもの性格にもよりプラスにもマイナスにもなりうるのであり、一義的にその影響を論ずることはできない。しかし大局的なおさえ方をすれば、今日の子どもの問題は、現代社会の特質・構造的な歪みが、おとな—とくに親の社会的意識・生活行動を通して子どもの生活に及んだ結果であるといつてよいだろう。子どもの問題はおとな、親のあり方の問題を抜きにして考えるわけにはいかない。

おとな、親の子どもへの影響をできるだけ具体的に明らかにして、今日の子どもの問題にたいする実践的な手がかりを見出したい、というのがこの研究の基本的な問題意識である。本稿では、これを「母親の子どもにたいする態度」が「子どもの発達」とどのように関連しているかという点に限定して、実証的に追求する。その資料は、私たちが行ってきた「鹿児島の子どもと親の生活と意識」調査で得られたものである。この調査結果の概要は既に『調査報告書(第一次)』¹⁾として発表しているので、個々の詳しいデータはその報告書にゆずり、ここでは資料の性質を示す簡単な紹介をしておこう。

調査は、子どもの自立を基本的な生活習慣の確立状況や自主性・主体性でとらえ、その自立の形成と関係があると思われる母親のしつけや親子関係(母子に限定)の特徴をさぐることを課題として、1980年5月から6月にかけて行なわれた。それは、子どもとその母親に別々に60問の質問(その多くは3~5の回答選択肢をもつ)を「質問紙」で回答を求め、それを統計的に処理するという方法で行なわれた。調査内容は、父母の年齢・学歴・職業・家族構成・生活水準など13項目と、子どもへの質問、生活習慣18問、親子の接触・認知3問、自主性10問、母親のしつけについて9問、母子関係20問の計60問、母親への質問、母子の接触・認知7問、家庭の生活条件3問、

しつけ 30 問, 母子関係 20 問の計 60 問である。調査票自体は無記名であるが番号により母と子がセットになっており, また質問内容もできるだけ同じにして母子の回答結果を比較できるようにした。調査対象は質問紙という方法上の制約と発達上の変化が著しい時期という点を考慮して, 小学 5 年・中学 1 年・中学 3 年の 3 つの時点の子どもとその母親とし, 地域的特性も考え「商業地区」「旧来からの住宅地区」「新興住宅地区」(以上鹿児島市内)と「近郊農村地区」(川辺町)の四地区を選定し, それぞれの地区の小学校・中学校から各学年の男女がそれぞれほぼ 100 名になるように学級を選び, 学級単位で調査票を配布・回収した。有効標本数は 2351 組である。標本の地区・性・学年別の構成は第一表に示すとおりである。

第 1 表 地区別・性別・学年別構成

地 区	商業地区		旧住宅地		新興住宅		近郊農村		合 計	
	男	女	男	女	男	女	男	女	男	女
小 5	97	78	93	99	102	82	98	87	390	346
小 計	175		192		184		185		736	
中 1	104	116	107	89	98	96	104	101	413	402
小 計	220		196		194		205		815	
中 3	89	90	114	111	94	100	102	100	399	401
小 計	179		225		194		202		800	
地区合計	574		613		572		592		2,351	
%	24.4		26.1		24.3		25.2			
男・女計	290	284	314	299	294	278	304	288	1,202	1,149
%									51.1	48.9

学年% 小5 31.3 中1 34.7 中3 34.0

II. 「問題の母親」の抽出

1. 母子関係の全体的傾向

今日の母親は子どもにたいして「支配的・干渉的・過保護的」な態度をとるものが多いといわれている。そしてそのような母子関係は子どもの自立に否定的な影響を及ぼすことも指摘されている。そこで, このような「問題の母親」をぬきだして, その子どもの生活, 人格的発達がどうかを調べ, その影響を具体的に明らかにしようと考えた。この調査の母子関係の質問は, 品川らの親子関係診断テスト²⁾の「拒否・支配・干渉・過保護・溺愛」の領域区分とその質問を参考にし, 各領域の傾向をひきだすことを目的としてそれぞれの領域ごとに 4 問の質問で構成した。そして各領域毎に 3 問以上について明確な肯定の選択肢を選んだものを (A) — その傾向をもつもの, また 3 問以上に明確な否定の選択肢を選んだものを (C) — その傾向を否定できるもの, その他のものを (B) — 中間的傾向のもの, と評定した。その結果は第 2 表のとおりである。(％はすべて

第2表 親子関係の傾向(%)

		拒 否	支 配	干 渉	過 保 護	溺 愛
小学 5 年	(A) 母子	6 19	17 47	6 8	14 7	1 4
	(B) 母子	66 24	81 32	82 75	44 59	39 57
	(C) 母子	28 57	2 21	12 17	42 34	60 39
中学 3 年	(A) 母子	5 26	14 45	6 3	14 3	2 1
	(B) 母子	66 18	82 33	72 61	45 41	40 54
	(C) 母子	29 56	5 22	22 36	41 56	58 45

※ 小数点以下4捨5入したため合計が101となる。

小数点以下を四捨五入した。中学1年は、多くの場合小学5年と中学3年の数値の中間にあり、あるいはそのいずれかに近い数値を示しているので本稿ではすべて省略した。なお数値は、それぞれの集団——たとえば小学5年の子をもつ母親全体736名——の中で「拒否」領域のAが6%、Bが66%、Cが28%……という割合を示す%である。）

表から明らかのように、「問題的傾向」を肯定したA群の母親は多くない。「支配的」で17%、「過保護」で14%いるが、この数値は、「今日の母親は…」ということが出来るほど大きいものではない。しかし、子どもの回答をみると、「支配」と「拒否」の2領域において母親の回答を大きく超えたA群がみられ、また母親は「過保護」「溺愛」では小5で42%、60%がその傾向を否定しているのに子どもの方は34%、39%の否定でしかないというように、母親の回答とは異なった様相の母子関係を示している。この表から読みとれる事実をまとめながら、ここに示されている母子関係の特徴を描いてみよう。

母親は、(1)小5と中3ではあまり変化していない——母親の子どもにたいする態度は小5から中3の時期には変らない；(2)「拒否・支配・干渉」については(B)群が多く、母親は中間的であまいな判断を示す傾向がある——自分の子どもにたいする態度をこの領域では肯定することも否定することも好まないのであろう；(3)「過保護・溺愛」については否定するものが多い；(4)以上と若干矛盾するようであるが「支配」「過保護」についてはそれを認めるものが他領域との比較では多い。

子どもは、(1)小5と中3ではちがいがあがる、「干渉・過保護」を否定する(C)群が20%前後も増加する、——おそらく子ども自身の判断基準・感じ方が小5と中3では異なるのであろう；(2)「支配」を感ずるものが多い、「拒否」も中3で1/4をこえる。しかし反面「拒否」を否定す

るものも母親より30%弱も多い——「支配・拒否」には子どもは比較的是っきりした判断を示す；(3)「過保護」について母が小5、中3ともに14%認めるものがあるのに、子どもはほとんど認めない。小5では、これを否定するものも母親より少なく、あいまいな判断を示す。「溺愛」でもこれを否定する子は母の回答より少ない。——これらは「過保護・溺愛」について否定しきれない気持があることを示すものではなからうか。上記(1)とも関連させると、この子どもの気持は中3になると変化し、「干渉・過保護・溺愛」を否定する(C)群の増大にみられるように、これらの領域にたいする判断基準・感じ方を「甘く」しているようである。

以上のように母子関係の認識・判断において、母子の間にかなり大きくいちがいがあること、とりわけ「支配」において母子のくいちがいは著しく、また「過保護・溺愛」などの観念・感じ方もちがうことがわかる。このことは母親が「支配」でないと思っているのに、子どもは「支配」を感じ、母親が「過保護」ではないかと反省しているのに子どもはそれを当然の関係として期待しているといったちがはぐさが、現代の母子関係の特徴として浮んでくることを示している。

2. 「問題」群と「対照」群の分別

さて、「問題的傾向」のある母子関係が子どもの自立にどのような影響を及ぼしているかをみるために、この「拒否」「支配」「干渉」「過保護」などの問題的傾向を濃密にもった母親とその子の集団とその傾向を示さない母親とその子の集団が比較できると好都合である。そこで母子関係の20問の質問の回答状況を調べたところ、(M46)の質問番号の質問にたいする回答がもっともよくこの「問題的傾向」を重疊的に示すことがわかった。この(M46)は「子どものしていることに『あれはいけない、これはいけない』と口を出すほうですか」という質問で、回答は(1)はい(2)どちらかといえばそうだ(3)いいえの選択である。——この同じ内容の質問が(C46)である。母子関係の質問はすべて、同じ内容を同じ番号でセットにしてある。——そこで(M46)の回答(1)の群をM-I群、(2)をM-II、(3)をM-III、とし、それと他の質問(母子とも)とをクロスさせて、各群の特徴をひき出してみよう。これらのクロス分析においては、このM-I~M-IIIの属性と組合せられた項目の属性(回答の選択肢に示される)との間で「独立性」の検定(χ^2 検定)を行なった。その結果、有意水準を0.01(1%)とし、それ以上の関係については表・図等に※(0.01~0.05)、△(0.05以上)の印をつけた。無印またはとくに断らないものはすべて有意水準0.01以下のものである。次の第1図は(M46)による分別によって、母親の各集団がどのような特徴をもつかを示したものである。(なお、M-IIは、M-IとM-IIIの中間の値をとるので、すべて省略した。グラフの中間の柱は全集団の平均%である。C-I、C-IIIは、それぞれM-I、M-IIIの子どもであり、その子どもの「母子関係」の回答の割合を示した。)

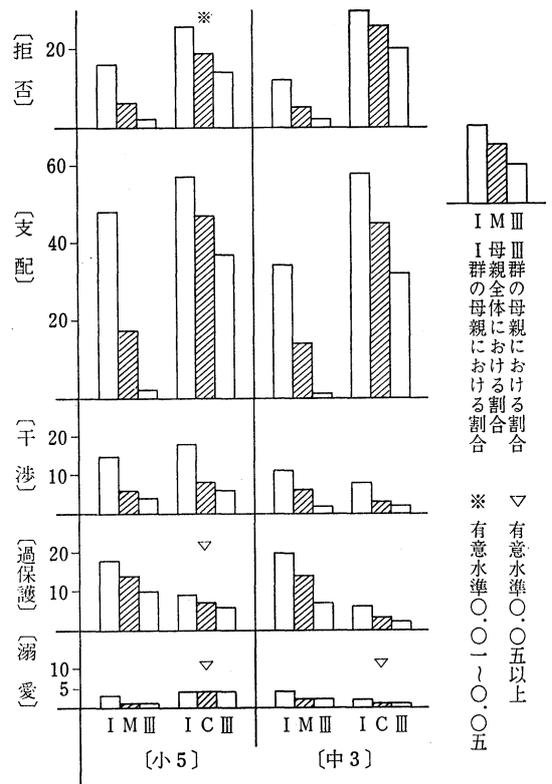
第1図は、左から小5のM-I、M(全体)、M-III、C-I、C(全体)、C-III、次に中3について同じ順で並べた。M(全体)C(全体)には斜線を施した。図から明らかなように、各領域ともに母親のM-Iは全体よりもきわだって高く、それぞれの「問題的傾向」の母親が多いことを示している。M-IIIでは反対に「問題的傾向」の母親はほとんど含まれていない。子どももほぼ同

じ傾向であるが、C-IとC(全体)との差は母親ほど大きくなく、またC-IIIはC(全体)よりは低い。「問題的傾向」を認めるものもかなり残っていることがわかる。中3では、母親の場合には各群ともに若干低下するが、子どもの方では「拒否」「支配」でI群が増加し、III群も「拒否」では増加するなど、母親とは異なった変化を示している。なお図には示さなかったが、中3でM-III、C-IIIは、それぞれの「傾向」を否定する者が顕著に多い。以上のように、(M-46)による集団の分別で、M-Iには「問題的傾向」の強い母親が、M-IIIにはほとんど「傾向」を示さない、むしろその「傾向」を否定する母親が属する集団がつけられた。そしてこの集団間の差は母親についてはすべて「有意」であり、子どもについては、小5「過保護」「溺愛」、中3「溺愛」を除けばこれもまた「有意」である。

3. M-I・M-III群の内部構造

先に「母子関係」の検討において、母子の間に大きくいちがいがあることを指摘した。また上記の(M 46)の回答による分別においても母親の方はわけて明確に分別できたが、その子どもでは母親ほどはっきりした傾向を示さないことを指摘した。以下においてM-I、M-IIIの母子関係や子どもの特徴を検出しようとするわけであるが、ここで、この母子の「ずれ」について若干具体的に数量的にみておこう。次の表は(M 46)と同じ質問(C 46)にたいする子どもの回答(C-1, C-2, C-3)とをクロスさせたものである。(無回答は除いた。)

表の左上の数字は標本実数、2段目右の数字はC群中の割合(%)下段の数字はM群中の%である。(M 46)(C 46)の質問は、母親の日頃の行動をたずねているものであり、比較的客観的に評価できる種類のものと思われるが、結果は上表の如く、母親の自己判断と子どもの母親認識はかなりの「ずれ」を示している。完全に母子が一致している(M-I, C-1)(M-II, C-2)(M-III, C-3)の割合は、小5で41%,中3で44%であり、中3で若干ふえるものの、半分以下である。回答選択肢の(2)は「どちらかといえばそうだ」という肯定に傾いた回答であるから、これを加えてみると(M-I, M-III; C-1, C-2)は、小5で40%,中3で39%であり、「ほぼ一致」を含めた%は、小5で62%,中3で63%である。以上のように母子の認識の一致度は、小5でも中3でもほとんど差はなく、完全一致は約4割、ほぼ一致も含めて約6割、対立する



第1図 (M-46)による分別集団の母子関係(%)

第3表 (M-46) × (C-46) (太数字は実数, 小数字は%)

(小5)	M-I	M-II	M-III	T	(中3)	M-I	M-II	M-III	T
C-1	50 21 47	119 49 39	72 30 23	241 100% 33	C-1	38 21 29	96 54 31	45 25 14	179 100 23
C-2	29 15 27	90 45 30	81 41 26	200 101 28	C-2	52 20 39	115 44 37	94 36 29	261 100 34
C-3	28 10 26	93 33 31	158 57 51	279 100 39	C-3	42 13 32	102 31 33	188 57 57	332 101 43
	107 15 100%	302 42 100	311 43 100	720 100 100		132 17 100	313 41 101	327 42 100	772 100 100
SIGN				Pr.<0.001	SIGN				Pr.<0.001

もの約4割とみてよい。ところで、対立する母子の約4割のうち(M-I, C-3)(M-III, C-1)のような完全対立組はどのくらいいるかをみると、小5で14%, 中3で11%である。先に完全一致の%ともあわせて考えると、わずかながら、中3の方が母子の相互認識が深まるように見えるが、この3%の差がどれほど意味があるかはわからない。

先に、母子関係の項でも指摘したが、母親の自己認識は小5と中3では大きな変化はなかったが、子どもにはかなり変化がみられた。この点はこの(M46)(C46)の回答でも同様である。子どもの回答は、中3では母親にたいする否定的な見方(C-1)が10%減少し、中間的あるいは肯定的な評価に転じている。

以上のように母子の認識のずれは、かなり複雑な構造になっている。ここでは以下の分析の関係からM-I群とM-III群のこの「ずれ」の特徴をみておこう。M-I群の子どもの中で母親と同じ認識をもっているC-1は小5の47%から中3では29%と18%も減少し、逆にC-3は26%から32%と6%増え、全体的に中3のM-I群の子どもは母親の「傾向」を反映する子どもはかなり少なくなっている。M-III群では、母親と対立するC-1の子どもが9%減少し、一致するC-3が6%増加し、この方はM-IIIの傾向をさらに反映する構造に変ってきている。このような変化は、M-I群とM-III群を比較していく場合に、中3ではその比較対照性が弱くなっていることを考慮する必要があることを示している。

III. 「問題」群の母子関係

1. 母子の日常的接触

母子の日常的な接触をみるために、(C6)「家を出るとき『いってまいります』, 帰ったとき『ただいま』などと家の人にあいさつをするか」⁹⁾, (C9)「外出するとき、家の人に行先や帰宅時間をいうか」の2つの質問で調べてみる。(C9)の問と同旨の質問を(M19)で母親にもしてい

